

<p><b>7月5日</b> <b>(日)</b></p> <p><b>ヨブ記</b> <b>9章</b></p>	<p>「このように、人間ともいえないような者だが、わたしはなお、あの方に言い返したい」(32節)。ヨブの心の中に、神への反論があふれている。ヨブは神を「あの方」と呼び、裁判の場で「わたしは正当に扱われていない」と訴えたいと叫ぶ(35節)。今、この世界にもヨブと同じ叫びがあふれていることを思いながら主日礼拝に集い、「あの方」が語られる言葉に聴きたい。</p>
<p><b>6日</b> <b>(月)</b></p> <p><b>ヨブ記</b> <b>10章</b></p>	<p>「手ずから造られたこのわたしを虐げ退けて、あなたに背く者のたくらみには光を当てられる。それでいいのでしょうか」(3節)。ヨブは神に背く者と自分とを比較して「納得がいかない」と叫ぶ。確かに比較をし始めたら、この世界は納得いかないことばかり。その一方で、私たちの小さな比較のものさしを超えて神の豊かな慈しみは今日も一人ひとりに注がれている。</p>
<p><b>7日</b> <b>(火)</b></p> <p><b>ヨブ記</b> <b>11章</b></p>	<p>「もし、あなたも正しい方向に思いをはせ、神に向かって手を伸べるなら」(13節)、「人生は真昼より明るくなる。暗かったが、朝のようになるだろう」(17節)。友人ツォファルの言葉は正論だが、ヨブの苦しみに寄り添っていないので、ヨブの慰めにならない。主イエスは正論ではなく「愛」を教えられた。なぜなら「愛」が人を生かし、朝のような明るさをもたらすから。</p>
<p><b>8日</b> <b>(水)</b></p> <p><b>ヨブ記</b> <b>12章</b></p>	<p>「獣に尋ねるがよい…空の鳥もあなたに告げるだろう…海の魚もあなたに語るだろう。彼らはみな知っている。主の御手がすべてを造られたことを」(7～9節)。1～2章では「豊かさに守られた無垢な正しい人」として登場したヨブが、今や「大きな不条理を苦しみ生きる人間」として、すべての被造物と共に神の前に立っている。ここに、変えられたヨブの姿がある。</p>

<p><b>9日 (木)</b></p> <p>ヨブ記 13章</p>	<p>「やめていただきたいことが二つあります。…わたしの上から御手を遠ざけてください。御腕をもって脅かすのをやめてください」(20-21節)。神の「御手」と「御腕」は人を慈しみ、守り、支え、導くもの。けれども苦しみの人ヨブは「遠ざけてほしい」と叫ぶ。主イエスが、徹底して苦しむ一人に寄り添われることで、神の「御手」と「御腕」を示されたことを覚えたい。</p>
<p><b>10日 (金)</b></p> <p>ヨブ記 14章</p>	<p>「木には希望がある、というように、木は切られても、また新芽を吹き、若枝の絶えることはない」(7節)、「だが、人間は死んで横たわる。息絶えれば、人はどこに行ってしまうのか」(10節)。旧約の人ヨブにとって死は終わりであり暗闇であった。主イエスの十字架において、死の終わりとは暗闇が打ち破られ、復活の希望の命が示されていることを感謝し覚えたい。</p>
<p><b>11日 (土)</b></p> <p>ヨブ記 15章</p>	<p>「天すら、神の目には清くない。まして人間は、水を飲むように不正を飲む者、憎むべき汚れた者なのだ」(15-16節)。「水を飲むように不正を飲む者」という言葉にドキッとさせられる。私たちは生きていれば必ずのどの渴きを覚える。その渴きを何によって潤すのか。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい」(ヨハネ7・37)の招きを感謝して。</p>
<p><b>12日 (日)</b></p> <p>ヨブ記 16章</p>	<p>「天にはわたしのために証人があり、高い天には、わたしを弁護してくださる方がいる。わたしのために執り成す方、わたしの友、神を仰いでわたしの目は涙を流す」(19-20節)。友人にも家族にも理解してもらえないヨブにとって、神のもとに必ずヨブを守ってくれる弁護者がいることに期待するほかない。イエス・キリストがわたしと神の間を執り成してくださる。</p>